

時の流れの中で(2)

—— 逆転する変化を見て ——

津守 真



今年の夏、ロンドンで私は精薄者の施設を訪問したいと思い、ロンドン大学のC先生に紹介を願った。そのときに直ちにもどってきた返答は、この国では現在には施設 (residential institution) という語は使いませんということだった。これは私の最初のショックだった。それでは何とこのかというかと、グループホームとか、ホステルがこれに代わるということであった。次のショックは、従来からの精薄施設は英国では一九九一年に閉鎖されることを知ったときである。閉鎖して後どうするのか、長年そこで過ごしてきた人や職員たちはどうするのか、だれにでも直ちに思い浮かぶ疑問をたずねつつ、私は紹介されたいくつかの場所を訪問した。

最初に訪問したのは、ウォルフソン・センターという、ロンドン大学医学部付属の障害

児診断センターだった。内容的には特にかわったこともないが、医学部付属なので、小児科の医者になる人々がここで障害をもつ子どもたち実際にふれ、心理教育の分野の実習をする機会があるということの教育的意義は大きいと思った。ここで案内をして下さったストックリー夫人にたずねたところ、英国では一九八一年に障害をもつ子どもたちを普通学級に入れる法律が通過し、特殊学級や養護学校が次々に閉鎖されたが、最近はまだもとに戻りつつあるという。普通学級ではこの子どもたちを丁寧にみるのが困難だということが分かってきたというのが主たる理由のようである。また、サッチャーの教育改革により、7歳、11歳、14歳、16歳の年齢で標準学力テストが今年から実施されることになったことも理由として見逃せないようである。

後日、ロンドンの郊外にあるウォルティングヴェースクールという養護学校を訪ねたが、広い庭と校舎があって、幼児のクラスから高校生のクラスまで六〇人の子どもたちもいるその学校では、毎年希望者が増加しているという。理由としては前と同じことが語られた。更に、精薄施設が閉鎖される現状で、養護学校の需要が多くなっていることも指摘された。

私は、是非、閉鎖されつつある施設を訪問したいと思っていたところ、ある晩、C先生から電話を頂き、セント・アルバンス・ホスピタルを紹介された。ホスピタルと呼ばれてもそれは全く従来からの精薄施設にほかならない。20歳から70歳以上の年齢の人々が六〇

○入所しており、約五〇〇人の職員が仕事をしている。目下、入所者をグループホームとホステルに移しているところで、あと数年で全員をコミュニティに移管するという。主任心理学者のデイヴィス先生が、二日間私につききって案内して下さり、私の疑問に丁寧に答えて下さった。

施設閉鎖の動機は二つある。第一は、ノーマリゼーションの考え方である。十五年前から提唱され、研究されてきたこの運動は、障害をもつ人々も、普通の市民と同じく、コミュニティのあたりまえの生活をするように、人生の幸福があるという考えである。これだけ聞けばごくあたりまえの考えのように思えるが、この五十年間、全く逆の方向で福祉は進んできた。コミュニティから隔離された場所で、一生涯生活を保証されて過ごすのが、子どもにも家族にも幸せであるという考えであった。その考えはいまや変化して、これまで何十年間も施設で過ごしてきた人たちを、コミュニティの中に移すという仕事を、心理学者、ソーシャルワーカー、指導員、教師たちがチームを組んで実行しつつある。デイヴィス先生は、その仕事の指導者である。

第二の理由は財政である。大きな施設を維持する必要がなくなり、施設の広大な敷地の売却費が収益となる。だからサッチャーは福祉の費用の節減のためにこの案を推進しているのだという人もあった。グループホームは三、四人の障害者を普通の家庭であずかる制度で、その家庭には補助金が出る。ホステルは二〇人程度の障害者のアパートで、障害者の専門の指導者が管理人となる。ただし、その管理は最小必要の限度にとどめ、障害者の

出入も行動も自由である。

果してこの方式が費用の節減になるかどうかについては疑問視する人が多かった。大きな施設は、一度閉鎖すればもとにもどすことはできない。そのことを考えると、これは大冒険なのだといふ人が語った。障害の人々に普通の生活をとるという人間的な考えのために、敢えてこの冒険がなされつつあるのを、私は眼の前に見たのだった。

セント・アルバンス・ホスピタルの敷地には、立派な煉瓦造りの建物がいくつも建っていた。門のわきにある建物はソーシャルスキル（社会能力）訓練とよばれていた。何十年もこの中で生活していた人たちが町の中に住むために、ある期間をここで教育を受けるのだという。学習理論による抽象的な訓練をするのではなく、実際にレストランやパブで食事をして、店で買物をし、郵便局にいくというような生活経験を積むことがここでなされていた。

グループホームやホテルで生活をはじめた人たちが、週一回ここにもどってきて、デイヴィス先生のチームの人たちとグループで話し合う。私はその会合に出させてもらったが、人によってはバスの中でトラブルを起こして、いまはこのホスピタルの職員が送り迎えをしていた。五十歳になるある人は、公園で子どもと遊んでいてトラブルを起こして警察の世話になっていた。こんなトラブルがありながらも、この人たちは普通のコミュニケーションの生活をさせるといふ冒険がなされつつあった。一度ここを出ていった人たちはだれ

ももう一度ここにもどりたいと思わないとデイヴィス先生は言われた。自分の家に住んで、いつでも店に買物に行けて、好きなときに家に帰ってねられるという個人の自由のある生活が、だれにでも人間にとって幸福のもとにあることがわかる。

施設を閉鎖するということは、障害をもつ子どもたちや大人たちを、障害者という特別な人として扱うのではなく、この人たちが一緒に生活する社会を実現するという、障害福祉社に対する考えの根本的变化を意味している。

この人々は、問題行動 (Problem Behavior) という語をチャレンジング・ビヘイヴィア (Challenging Behavior) という語に代えることを提唱する。いわゆる困る行動というのは、子どもに固有のものではなくて、むしろそれは大人が自分の固い考え方を変えるようにチャレンジされているのだという。大人の見方がかわれば、同じ行動が問題ではなくなる。更に進んで、個人がチャレンジされるのではなく、社会がチャレンジされているという考えがここにはある。ソーシャルサービスが用意されれば、どんな行動も問題性は減じる。人手が用意され、タクシーや車椅子のサービスなどがなされれば、コミュニティはいろいろの人が住める場所になる。

四十年前には、障害をもつ子どもたちが大人になった施設で生活することはあたりまえと考えられ、そのときに困らないように小さいときから訓練することが必要なのだと考えられた。それから四十年を経た現在、こうして施設で生活している人たちを、普通のコ

コミュニティの生活にもどす作業をしている。

この夏、ロンドンで実際にこうした体験をし、私は福祉の分野が革命的变化をしつつある時代であることを感じた。

同じ方向の変化は、教育の分野にも起こりつつある。学校、幼稚園、保育所の建物の壁の中で、個人の能力を伸ばすのに役立つカリキュラムを実施することが教育の最大関心事ではなくなりつつある。インターカルチュラリズム（異文化間教育）に見るように、移民や異文化の人々の異質性を尊重し、多様性を含めることによって新たな文化が創造されるという考え方は、ヨーロッパの教育の大きな流れになってきている。こう考えると、障害をもつ子ども、その多様さのひとつにはかならないだろう。

四十年前に当然と考えられていたことが、時の流れの中で、全く逆転するような変化の中で私共は仕事をしている。日本ではまだゆるやかな変化であるが、障害の子どもや大人を含めたあたりまえの幸せな人間生活を、どのように現代の現実の中に実現させるかが私共の当面しているいまの課題である。

（愛育養護学校）